

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2010年2月-2010年3月

授業のない2-3月は研究三昧と思いきや…。講習と実践三昧。もちろん、そこには自分を広げてくれる様々な出会いが…。

■ワーカホリック

2月7日

本年度最後となるJ O Aの普及研修会を愛知で行った(詳細は前号の松澤氏の記事参照)。この日の研修は、各自自己紹介から始まる。「時間を決めてポイントをしゃべるのも指導者の要件」と、1分制限で厳しく切った。要領よく話しつつ、インパクトのある話をするヒントを互いに学びあったようだ。

愛知の新帯氏は、「普及とは性欲みたいなものだ」というジョークで笑いを誘った。食欲とは自分自身が生きる欲求であり、オリエンテーリングなら自分で走りたいという欲求に相当する。一方、性欲は種族を保存する欲求だ。個体の性欲が落ちれば、その種の個体数は減少する。「性欲」がなければ、そのスポーツは普及しない。「性欲」が出てきたということは、オリエンテーリングの世界も成熟したということなのだろう。

2月14日

早大OC大会。レースの日だというのに、朝から精神的に疲れていた。まじめに臨むレースだから、眠りが浅かったのは仕方あるまい。寒いので、スタートまで走ってちょうど25分前に走り出すが、3分くらい走ったところで、あらら、ゼッケンを忘れていた。

ぎりぎりの移動時間で、往復6分のロスはきつかった。その「アップ」が効いたのか、1番まではトップラップ。このランニングコースでトップと4分30秒差もさることながら、地図読みが追いつかず、レース慣れしている時にはありえない場所で止まって進路を吟味してしまう。技術<走力というアンバランスは、ある意味伸びしろがあることを意味する。

地図交換をすぎたあたりで、前を走っている選手が上半身裸なのに気づいた。一瞬、世界選手権で並走していたスウェーデンのマルティンが枝を太股に刺して大出血したのを、上着を脱ぎ捨て



▲奥武蔵ロゲイニングの前日、ナビゲーション講習には30人を越える人が集まった。ランドネ系女子に地図の読み取りを指南する筆者

て止血にあたり、救助後、上半身裸でゴールしたチェリ・ジョルジョのことが頭によぎった。

7へのアタックで捉えて尋ねたら、なんのことはない、ウェアを忘れたので、裸でスタートしたという。出走させたのもどうかと思う。2枚のウェアのうち1枚を与え、なぜ裸で走ってはいけないかを説教し、そのままレースを続けた。

この日は、なんで出たんですか?という質問やら顔を、レース後何人かにされた。よもやそんな質問を受けるとはね。年間に2-3回しかレースを走らない僕が、ローカル大会に来たのだからそう言われても仕方ないか。

「走りたいから」という以外に、この質問への答えがあるはずがない。僕にとっての早大OC大会は全日本に向けての重要な調整のレースであり、質と参加者が保証される大会だから、出られるならいつだってでたい。それだけの話だ。

2月20日

沖縄のロゲイニングに向かった。イベントの経緯は前号で木村君が詳細に報告しているので、はしる。こういう地域の動きを応援したい。それと少しは日常を離れてリラックスできるかなど。こういう相反する目標を掲げると、結局リラックスできないもんだな。

21日のロゲイニング当日は、スタート前に右アキレス腱に軽い違和感を覚えたが、3時間よく走れた。沖縄の地ビール「オリオン」の工場前や、町中の道路の真ん中にある「がじゅまるの木」(亜熱帯らしい樹木)が沖縄らしい。15時に宿に帰って、ビールを飲みながら反省会。リラックスモードのつもりが、ついPCに向かって走行距離の計算などをしてしまう。この性格、死んでも治らん。その後は、運営者や本土からの参加者を交えて大宴会。沖縄の郷土料理を満喫。

翌22日は、沖縄満喫観光!と思ったが、さて、どこに…。やっと思いついたのが「辺野古」だった。2月頃には全国でも、ある意味もっともホットなスポットとなっていた。海岸にはすでに2000日以上続けている座り込みのテントがある。その海岸線から沖合を見ると、美しい海が見える。野次馬的なノリで訪れても、この地の美しい海岸を見たら、「やっぱりここに基地作ったらまずいっしょ」となる。自分にとってニュースの中の世界でしかないことが、少しだけ現実感を増した。

次に目指したのはセーフアウタキ(斎場御嶽と書いて、そう読ませるのが、またエキゾチック)と久高島だった。これは「聖地オタク」の木村君の発案。セーフアウタキは琉球王朝の最高の聖

地で、世界遺産でもある。それからフェリーに乗って久高島を訪れる。詳細は、前号の木村レポートに。つかの間のスローライフ（もどき）。



▲沖縄ロケイングで、パートナーの田島利佳と、スタート前に。スタート前にしてやや疲れ気味。翌日「観光」で訪れた辺野古。座り込みのテントが生々しい。

2月26日

県の産業局で行っている富士山研究の発表会。この2年間、いくつものイベントをふまえて、朝霧高原をアウトドアパラダイスにという提案をした。その他にも7つの発表が3時間にわたって、市民や関係者の前に提示された。それぞれの発表は悪くないと思うが、今ひとつ聴衆にインパクトを与えられず。地域振興も難しいなあ…。

2月27日

昨年7月にトムラウシ山で中高年9名が死亡する大遭難があった。ツアー会社の主催、状況対応のつたなさの2点から山岳界あげての大問題になった。その検証シンポジウムが神戸で開催された。司会者を頼まれた時、是非とも関係者に聞いてみたかったのは、ツアー会社・ガイドだけの責任（問題）か、だった。たった一人の顧客から「山頂に連れていくと旅程表に書いてある。なぜ下山なのか」と言われれば、ツアー会社は無理しても顧客のニーズに応えようとする。参加者一人一人が自然に入ることに伴う自己の責任を意識しない限り、この種の事故はなくなるのではないかという問題意識があった。驚いたことに（というか、意識の高い人が集まったというべきか）、「自分の安全をこんなに人任せにしているのか」という問題意識は多くの参加者が共有していた。慣れない分野の司会でぐったりだが、充実の一日。

2月28日

数年ぶりの静岡大学大会。こちらは勝手に応援団の市民向けイベントを併設。あいにくの雨だが、10名ほどの人が集まった。その後はMAのコースをフラッグなしで走る。地図もよくなって、まじモードで走ると、「全日本ミドル」くらいの気分になれる。

3月5日

3月に入ったところから、覚醒感と焦燥感が少しづつ強くなっていった。辛いと思うことなど一つもしていないつもりなのに、何かストレスになっているのだろうか？5日の朝霧での野外講習の朝は最悪だった。せっかくゆっくりできると思ったのに、焦燥感で寝床にとどまることができなかった。ジョグにいけば、その間中、仕事のことを考えていた。ジョグをしながら研究や仕事の手順を考えることはいくらでもあったが、この日は、いくら考えても内容がちっとも収束しない。脳の一部が勝手に活性化して、前頭葉のコントロール外のところで活動している。

こりゃあ、ほんとうにワーカホリックだ。朝霧野外活動センターでコーディネーターをしている、かつての教え子である臨床心理士に真顔で相談した。「先生、何もしないことできないでしょう。だから、手芸とかいいみたいですよ。それから予めマッサージとかリラクゼーションできる時間の予約を入れてしまうこと」。いや、ごもっとも。

翌6日は、JOAの理事会プレミーティングが大崎であった。時間があつたので、さっそく大崎の駅ビルでマッサージを受けた。マッサージの間中、何もしないことに対していらいらしていた。相当重症

■二つの雪国で

3月9日

東京での研究ミーティングに参加した。テーマは空間的思考。僕に期待されているのは認知心理学の視点なのはもちろんだが、オリエンテーリングという空間的なスポーツをしている視点、あるいはそこから学んだ視点をどこかに入れられないだろうか。そんな密かな役割を構想しながら、発表を聞いていた。

その日の夜は、登山研修所の冬山研修のために富山に飛ぶはずだったが、霧のため飛ばず、羽田宿泊。

3月10日

国立登山研修所では、2000年に冬山研修の最中の雪庇の崩落で学生二人を亡くした。この事故は裁判を経て、遺族と文部化学省の和解にいたつた。その後、約2年にわたる検討の末、10年

ぶりに冬山研修が再開された。安全対策のためのカリキュラムの構築、実際の冬山でのGPS測位などに関わったが、検討した対策が実際に生かされるのか。その一方で、自分が構想するナビゲーションスキルの体系が厳しい冬山でも通用するのか。その両方を確かめたくて、時間をやりくりして4日間の研修に参加した。

学生2人がなくなった事故の影響は大きい。再開に当たってテレビや新聞数社が取材に来るどころか、TV局も、地元の山岳ガイドを雇って、冬山の1泊2日の研修を取材するフィーバーぶり。

冬山では雪で地形が見えないから夏山と同じナビゲーションはできないという人がいる。しかし、所詮、雪が積もっても10mを越えることは希だ。しかも辺り一面ほぼ同じ厚みでつもる（もちろん吹き溜まりはあるにしても）。それに対して等高線は10m間隔だ。雪の厚さなど省略や誇張の範囲内なのだから、夏山のナビゲーションが通じないはずはないと思っていた。

今回の二日間の山行で、その予測は裏付けられた。むしろ藪もなくなり葉も落ちているために視界が開け、しかも雪と空や木々のコントラストは大きくなり、地形は読みやすいくらいだ。確かに、夏のように道を歩くことはない。手がかりになるのは地形だけだ。「夏と違う」という人は、夏には地形をよく見ていないので、「違う」という結論に至るのだろう。尋ねた講師の人も全くそのとおりだと言ってくれた。不要でも夏山で地形を見て歩くことが、オールラウンドなナビゲーション力につながることを確かめられたのは大収穫であった。

仕事ではあっても、直接学生の面倒を見る講師ではないので、気楽なものだ。本部のスタッフも日本山岳界のトップクラスだが、トラブルがないので、いたってくつろぎモードであった。副主任で地元山岳ガイドのTさんがしたことと言えば、前日夜遅くまでかかってきりたんぼを手作りし、山頂できりたんぼ鍋を作って、スタッフを終始和ませたことくらいだ。そのゆとりこそが、安全の源の一つなのだと思う。

3月15日

北海道に飛んだ。雪中の北海道で3日間の講習会を持った。スキーオリエンテーリングの世界選手権では、ルストリゾートとそのスタッフの方々には並々ならぬお世話になった。そのお礼奉公である。

3日間の講習会はさすがに消耗したが、スタッフの真剣さと楽しそうな様子のご褒美となった。彼らの多くはた

またま仕事でオリエンテーリングとつきあいができた。しかし、その熱意はなまじのオリエンティアよりも遙かに高い。年間 1000 人以上の初体験の高校生にオリエンテーリングを教えるのに至っては、どんな指導者も太刀打ちできない。インカレ表彰式のインタビューで、「ルスツでオリエンテーリングを体験して楽しかったので、大学で始めました」という声を残念ながらまだ聞いていないが、そんな日もいつかは訪れそうな気がする。もちろんそのための仕掛けづくりは彼らの仕事ではなく、こちらの任務である。



▲ルスツでの指導員講習の様様。ロールプレイングで、指導場面を実習する。

3月20日

アジア選手権の準備のために愛知の会場を見て、多治見に移動する。運転は疲れるが、現地作業は孤独なデスクワークへの清涼剤である。翌日は、柵の湖で山川及びITチームとテレイン、会場の下見。こういう「ボランティア精神」によって日本のオリエンテーリングは支えられている。



▲マッパー山川(右)とITチームとともに。こういう「ボランティア」によって日本のオリエンテーリングが支えられている。

3月24日

1月以来いじっているデータを新しい統計手法で、ああでもないこうでもない解析して、どっぴりつかる。よく準備されたトレーニングに似た楽しさ。

■ナビゲーションスポーツの可能性、再び

3月25日

古今書院から、「地理」4月号がどっさり届いた。地理教員や地理教育研究者を主たる対象とするこの雑誌から、

「オリエンテーリングと地図」という特集を組めないかと相談されたのは、4ヶ月ほど前のことだった。地理教育に携わる人の多くが目にするこの雑誌の特集企画は願ってもなかった。執筆者は、僕以外はすべて地理学を専門とする教員や大学研究者である。表紙はフィンランドの世界選手権の地図と走るオリエンティア。カラー口絵が4pもあって、全部で53pの大特集だ。1200円と、やや値は張るが、それだけの価値のある一冊に仕上がった。

3月26日

5日間の「大遠征」の初日。地元FMの出演に始まり3つの用事でぐちゃぐちゃになった。そのいずれもが、あまりに楽しく刺激的な話だったからだろう。こういう大きな動きとどう関わっていくかが、僕自身にもオリエンテーリング界にも問われている。

3月27日

奥武蔵ロゲイニングのナビゲーションセミナー。初心者組についた。その中のランドネ系(注:エイ出版が女性向けに出しているお洒落アウトドア雑誌の名前)の女性に「どうして来たの?」って聞くと、「はじめてだけど、友達と見つけて、ハイキングみたいでおもしろいから」という。山に入る時も、マフラーにショートパンツにタイツという今時の若い女性姿。山を歩く足元もたどたどしい。ケアしないと危険だと思って近くで見ていると、驚くことに地図がめっぽう読めるのだ。特徴のない尾根を下り、補助曲線で軽く張り出す尾根分岐で止まろうという課題にも、「あそこが少し膨らんでるからここかな」とびたっと止まる。こんな「発掘」が講習会の楽しみの一つである。

3月28日

今回のロゲイニングは、レクチャー&チャレンジクラスを設けた。どうせ6時間もある制限時間。普通の人は持て余すだろう。前日に講習に出れない人もいる。何より実際に使う地図とコースがあれば、具体的な講習ができる。そこで最初の1時間くらいレクチャーして、あとはご自由にとというのが、このクラスの趣旨である。もともと普通のオリエンテーリングでも、初心者に校庭で説明するよりも、一緒に歩きながら説明する初心者説明があってもいいんじゃないかなと思っていたことだが、こうやって実現した。参加は5組、約20名。3チームを連れて、作戦やナビゲーションを教えながら1時間ほど歩いた。

日和田山の山頂で解散した。その後

自分自身も奥武蔵グリーンロードを進み、西武線に降りようと思っていたが、ついつい長い尾根を越生まで走ってしまった。2時間に1本の八高線には、多くのロゲイナーが乗っており、ロゲイニング列車の趣である。

この日のメインイベントは、阿闍梨の高橋の送別会&結婚おめでとう飲み会。阿闍梨を支えてくれた高橋の帰郷は、福島における新たなオリエンテーリングの始まりである。



▲奥武蔵ロゲイニングの2ショット。親子連れ(下)からトップアスリート(上)まで、同じ舞台上で楽しめるのがロゲイニングの魅力

3月29日

昨冬からナショナルチームに関わり始めた早稲田の競走部(だったかな)で箱根駅伝2区区间賞の原さんに、早稲田キャンパスのスプリントマップ作成の指南をした。オリエンテーリングをはじめてたった3ヶ月で、「何を拾って、何を描けばいいかがよく分からない」という質問ができるところに、彼のセンスの良さが表れている。

その後は、八重洲口での東大のインカレ祝勝会に出席。同期の鈴木に「村越もこういうことに興味持つ歳になったか」と言われる。そーいえば、4月にある中学のクラス会も初めての出席。

3月30日

監査法人主催の新法人移行セミナーに出席。セミナーの大収穫は、目新しいことがほとんどなかったという点だ。概念的な面から実務面まで、私たちが考えていたことはほぼ適切だったということだ。この5日間の遠征は読図講習で知り合ったYさんのオイルマッサージで締めくくろうと思っていた。全身がほぐれた。マッサージもようやく効果が始まったかも。

(村越 真)